



僕と母さんが

男と女になるまでの一週間

午前央人

神尾雅には一人息子がいる。
彼女の息子・有介は、生粋のオナニストだった。
彼はある日気づいてしまった。
彼の一番身近に、最高のオカズが存在するということを。

僕と母さんが男と女になるまでの一週間

目次

はじまり	5
覗く	21
オナニー	36
入浴	49
またオナニー	62
マッサージ	76
手コキ	91
またまたオナニー	101
母もオナニー？	118
母のオナニー	121
母と息子のオナニー	128
暴発	145

慰め	152
思い出しオナニー	163
夢の残滓	167
やっぱり母でオナニー	174
筆下ろし	183
近親相姦	195
その後のふたり	205

はじまり

あるところに、ひと組の母子がいた。

母の名前は神尾雅。

年齢は四十代。年よりも若く見られることも多いが、肌の張りは失われつつあり、よく見ればそれなりにおばさん。

着痩せするタイプで細身巨乳だが、やはり年齢には勝てず、いろいろなところに余計なお肉が付き始めている。

息子の名前は神尾有介。

雅の一人息子で、少々お馬鹿なオナニ―大好きマン。

有介は小さなころは野球少年だったが膝を壊してしまい、激しいスポーツからは身を引いた。

とはいえ身体を動かすこと自体は好きで、無駄に筋トレなどを重ねた結果、なかなかの細マッチョで精悍なイケメンに成長した。

しかしながら、これがモテない。

ルックス自体はいいのだが、普段の言動が明らかにおバカ。

キャラとしての人気はあっても、恋愛対象としては誰も見てくれない。

男子は当然として、女子からも。

そして成績は下の下。どうして今の学校に入れたのかわからないくらいの低空飛行。

それなのになぜか教師陣に好かれているのは、有介の性格の良さの表れなのかもしれない。

そんな有介の大好きなものはオナニー。

少なくとも1日3回。休日には6回や7回。

おかげは基本的にAVである。

ネットで購入した動画をスマホで見ながらシコシコする。

とはいえ母子家庭である神尾家はそれほど裕福ではない。

当然のことながら有介が購入できるAVにも限りがあり、彼は数少ない動画を何度も何度もリ

ピートして楽しんでいた。

その状況に不満はなかったが、それでもやはり時には新鮮なおかげが欲しくなる。

そんなときに役に立つのが妄想。

有介の妄想力は、かなりに高かった。

AVで見た内容を自分に置き換えて妄想。

さらにはAVで見た内容を別の女優さんに置き換えて妄想。

2つの妄想を組み合わせて、TVで見かけた美熟女タレントと、AVのようなシチュエーションで自分を関係させたり、雑誌で見かけた美人熟女が自分を優しく犯してくれたり。

そう。有介の好むジャンルは、熟女モノだった。

ロリでもJKでもなく、熟女一辺倒だった。

そんな有介は、当然ながら童貞であった。

そんな神尾家の、ある日曜日。

いつものように母は家事をこなし、息子はボーツとその様子を眺めていた。

そんな息子の脳裏に、唐突にある一つの考えが浮かぶ。

（そういえば……母さんも熟女といえは熟女なんだよなあ）

根っからの熟女マニアの有介。

当然のように、今朝も熟女モノのAVで一発抜いていた。

それでも有介の性欲は収まったりはしない。

湧き上がってくるムラムラとした感情に身を委ねながら、ブレーキの壊れたトラックのように

妄想を加速させていく。

（あの作品の女優さんも、あんな風に部屋を掃除してたっけ）

脳裏に蘇ってくる、おかずにしたAVの熟女優の姿。

色っぽい佇まいのそれが、自分の母親にオーバーラップしていく。

そして、現実と作品の境目がおぼろげになっていく。

（あれ……もしかして……）

それが事実なのか、それとも性欲の影響を受けた認識の歪みなのかはわからない。

しかし有介の意識は、気づかなければよかったようなことに気づいてしまった。

そしてそれは、有介の中では事実ということになってしまった。

（あのA Vの女優さんより、母さんの方がスタイルよくね？）

しゃがみこんだときの、むっちりとしたショートパンツのお尻のライン。

かがみ込んだときに見えた、タンクトップから溢れそうになる胸の谷間。

よく見るとたるみはじめている二の腕。

うつすらと刻まれた、目尻のシワ。

2 Dと3 Dの違いはあるだろうが、有介の目にはそれはとてもとてもエロティックでオナ

ティックでティック○トツクな逸品に感じられた。

即座に男性器に血液が流れ込む。

カーペットに寝そべっていた有介は、腰のあたりをモゾモゾと床に押し付け始めた。

*

*

*

（ふー、ようやく綺麗になった。このシミ、ずっと気になってたのよね）

四つん這いでゴシゴシとキッチンの床を拭いていた雅は、ゆっくりと腰を伸ばしながら身体を
起こしていく。

固くなった背中や腰を伸ばそうと、眠りから覚めた猫のようにグーッと背伸び。

それが背後にいる自分の息子に、どんな風に見えるかは気づいていない。
というか、そこに息子が寝そべっていることも、彼女は意識していなかった。

（昔はこれくらいなんてことなかったのに）

周りからはよく若く見えると言われる彼女だったが、若く見えるということと実際に若いということには大きな違いがあった。

じわじわと忍び寄ってくる老い。

若いころには何でもなかった動作が、最近ではかなりキツかったり大変だったりする。

（パート先の貞子さんも、こないだぎっくり腰やったって）

雅は昼間、スーパールのレジでパートをしている。そこで交わした年の近い友人との会話の内容を、彼女は思い出していた。

（梓さんはなんでもないとところで転びやすくなったとか言ってたっけ。あーあ、やっぱり私たち、もうおばさんなのよねえ）

トントンと腰の後ろをグーにした手で叩く。

そうした動作すらおばさんくさいのだが、無意識にやってしまうのだから仕方がない。

彼女は掃除の続きをしようと、後ろを振り返った。

「ん？」

そして、そこにいた息子に気づく。

「ゆうくん、そんなところにいたの？　休日なのに出かけたりしないの？」

「家でゆっくり休むから休日なんじゃない」

「ま、それもそうね」

なんでもない会話を交わす、ごく普通の母子の光景がそこにはあった。

息子の、妙なモゾモゾした動き以外は。

「それ、ツツコンだ方がいい？」

「いや、気にしないで」

「そーいうわけにはいかないでしょ」

雅は、息子が何をしているのかわかっていた。

彼女の息子は、根っからのオナニストだ。

小さなころから暇さえあればシコシコと自分の性器をイタズラしてきた。

昔は何度も叱ったり注意したりした。

でも、もうそれは諦めていた。

そもそも彼女は、オナニー否定派ではない。ただ、やりすぎが心配だっただけ。

それがどれだけ注意しても治らないとなればもう、諦めることしか彼女にはできなかった。

なにしろ彼の息子は、オナニーをやめた途端に連日の夢精を繰り返すくらいの底なしの精力を

見せつけたのだから。

「あのね、それ床オナっていうやつでしょ？　そんなのばっかしてたら、普通にセックスできなくなっちゃうわよ？」

「セックスする予定なんてないから平気」

「今のところはでしょ？」

「まあね」

「っていうか、せめて話してるときくらいやめなさい」

「うーん、いいところなのに」

カーペットに押し付けた腰を左右に揺さぶっていた有介。

名残惜しそうに、その動きを止める。

「そんなことばかりしてるから童貞なんじゃないの？」

からかうように雅が言う。

「それとこれとは関係ない」

「ま、それもそうね」

「そもそも、童貞の何が悪いの？　僕らの年齢なら不思議でもなんでもないでしょ」

開き直ったような有介の言いように、雅が即座に反論してくる。

「そう？　母さんの若いころは、有介くらいの年でも卒業してる人けっこう多かったわよ」

「え！　うそ！」

母の予想外の答えに、有介の中に焦りが生まれる。しかしそれがなんなのかは、有介にはわからなかった。

モヤモヤとしたはつきりしない焦燥感。意識してしまった瞬間から、有介はその正体不明の感覚に炙られ続けた。

「そうね……クラスの半分くらいの男子はもう経験してたんじゃないかしら」

「マジか……」

どこか遠い目をする雅。もしかすると、当時のことを思い出しているのかもしれない。

「今の子はもっと進んでるから、それ以上なんじゃない？ スマホとか、簡単に繋がれる時代だし」

「くっ……」

そのクラスの半分くらいの男子のうち、何人かは自分が相手だったことは、雅はさすがに言ったりはしない。

今でもそうだが、雅は頼まれると嫌とは言えないタイプだ。

そこを見透かされていたのか、それともそういう男子に好かれやすかったのか、雅は何人かの同級生に懇願され、その相手をしたことがあった。

そのうちの一人が、死別した旦那だったことは息子の有介にも内緒だ。

「ともかく、いつまでもオナニーばかりしてないで、彼女でも作ってちゃんとしたセックスしな

さい」

「そんなこと言われてもなあ」

母の雅の目から見ても、息子の有介はそんなにブサイクではない。それどころか、今流行りの細マッチョとかいうやつでそれなりにモテそうに思っていた。

ところが、実際には違う。

これまで一度たりとも、雅は有介のそんな話を噂でも聞いたことはなかった。

おそらく理由の一つは有介のアレ。

なんとなくだけど、雅にはその察しがついていた。

「いないの？ クラスにそういう子」

「だーめだめ。同級生なんて、みんなガキだよ」

「あら、可哀想。若くて可愛い子多いのに。知らないけど」

「若いだけだろ？ やっぱり女性は大人の人じゃないと」

予想通りの答え。やっぱり理由は、有介の好みが原因のようだった。

「ほんと、あんたの熟女好きは相当なものよね。部屋掃除してはじめて気づいたときビックリしたわ」

「ペドとかよりいいでしょ」

「うーん。それはそうなんだけどねえ」

息子の部屋を掃除したときに見つけた、熟女モノのいかがわしい雑誌。

今では興味の対象が動画に移ったようでそれが増殖することはなかったが、それをはじめて見つけたときは衝撃が走った。

当時の自分よりも年上（という設定）のモデルたちが、肌もあらわな格好で淫らなポーズをとっている。若いピチピチしたグラビアアイドルがたくさん出ているような雑誌なら雅も目にしたことがあったが、ここまで熟した女性が出ているようなものは……。

「で、あんたの言う大人の言う女性の性ってのはどのくらい人たちのことなの？　OLとか女子大生とか、そういうのじゃダメなの？」

一縷の望みをかけて、有介の好みをさらに深掘りしてみる。

「うーん、まだ足りないな。人生の酸いも甘いも噛み分けるくらいの年頃じゃないと」

「それ、もう年頃とかそういうの超えてるでしょ」

「だから熟女って言うんじゃない。熟してないとダメなの」

「はあ……重症だわ」

わかっていたことだったけれども、彼女の息子はもう手遅れな感じだった。

初潮を迎えたらもう熟しすぎ！　とか言っちゃうようなヤバイ方向じゃなかったことはまだ救いだが、それでも母親としては頭を抱えてしまうほどの捻じ曲がりようだった。

「母さんくらいがちょうどいいかな」

「は？」

「熟しすぎず、熟さなすぎず。脂が乗りきったまさに女盛りってやつ」

予想外の息子の言葉に、雅はたじろいだ。それでもなんとか母親として気持ちを奮い立たせ、強がり言う。

「それは……さすがに年上すぎるでしょ。あえて言うけど、私なんてもうおばさんよ？」
やや自嘲気味の言葉。しかしそれこそが、有介のツボだった。

熟女：年齢故に女であることを諦め始めた存在。

だからこそ逆に、女であることを強烈に意識している。

美しくありたいと願いながら、刻一刻とその美しさは衰えていってしまう。

そのジレンマに怯えながら、どうにかして時の流れに逆らおうと懸命に努力する。

その醜さ儚さに、有介はこの上ない愛おしさといやらしさを見出していた。

そして目の前にいる母もまた、その熟女の一人だということを認識してしまっていた。

「そうだ。ならさ、母さんが教えてくれよ。その、ちゃんとしたセックスってやつを」

「は？」

「よく考えてみたら僕の好みにぴったりのって母さんなんだよね。うん。いい考えだ」
半ば勢いから出た言葉だった。

もしかすると、昨夜見た熟女AVが近親相姦モノだったことも影響していたかもしれない。

でも、その気持ちは嘘ではなかった。

いまの有介にとって、雅は母である前に熟女。

それも、自分の好みにジャストフィットする極上の熟女に見えていたのだから。

（ま、無理だよな。そんなのわかってる）

基本的にポジティブでありながらも、細かい部分ではややネガティブなところのある有介。

そういうところは今は亡き雅の旦那……繊細だった有介の父親に、若干似ていた。

「私が……あんたに？ セックスを？」

（あれ？）

雅のその反応は、有介の予想と少し違っていた。

（もったこう……パカーンと頭でも叩かれて終わるかと思ってた）

ポジティブオナニーマンである有介。その母である雅も、かなり豪快な性格をしていた。

それこそ、大抵の冗談を笑い飛ばしてくれるくらいの。

（もしかしてこれ……イケる？）

ムクムクと未知の感情が有介の中で頭をもたげてきた。

生まれてはじめて感じた、セックスの予感。

それは彼が考えたこともなかったくらい、妙に有介を興奮させた。

床オナの余韻で半勃ちだったペニスが、カチカチになるくらいに。

「ないない、さすがにそれはない」

笑いながら顔の前で左右に手を振る雅。

ガツカリした気持ちと、ホツとした気持ちがある有介の中で入り混じる。

（なんだ……これ……）

それもまた、有介がはじめて感じる感情だった。

ちんこのあたりがムズムズする。

触れてもいないのに、妙にちんこが気持ちいい。

肉体的刺激ではなく、精神的なゆらぎからくる快感。

はじめて感じたその感覚は、有介の脳裏に刻み込まれてしまった。

「年の差もあるけどさ、そもそも私たち母子じゃない。セックスとか、絶対にありえないよ」

笑いながら、雅がそう言ってくる。

母の口から出るセックスという単語。

今までは意識してこなかったけれども、今日は妙にそれが艶めいて聞こえた。

有介は思った。

今夜のおかずはこれに決まりだと。

母のことを考えながらするなんて想像もしたことなかったけど、これは確実にめっちゃくちゃ気持ちよくなれるおかずだと、彼の本能が言っていた。

グニャグニャにネジ曲がった、彼の本能が。

そしてそんな彼の本能に呼応するかのように、母がさらなる予想外の行動をしてくる。

「ま、私にできるのはこれくらいかな」

そう言っただけで母は、自分のショーツパンツに手をかけた。

（え？）

ホックを外してウエストを緩めると、おもむろに太ももの中ほどくらいまでそれを下げた。

「ッ！！！」

思わず反射的に立ち上がる有介。

直立不動で、気をつけをしてしまう。そして有介のペニスもまた、直立不動で気をつけの体勢をとっていた。

「うわ、すご……」

若干引き気味な母の表情。その視線は、盛り上がった有介の股間に注がれている。

ズボンを押し上げる有介のペニス。

それは母の予想を上回るサイズを、簡単に想像させうる盛り上がり具合だった。

「あんだホント欲望に正直よねえ」

複雑な心境の母。

息子の成長自体は喜ばしいことだけれども、その欲望が自分に向けられているというのは

ちよつと考えるものだ。

まあでも、素直に嬉しいという気持ちもある。

なにしろ、そういう目で見られることなんて随分とご無沙汰だったのだから。

「サービスはここまで。目に焼き付けてオナニーでもしなさいな。できるなら、だけどね」
そう言って彼女はショートパンツを引き上げようとする。

有介は焦って、自分のズボンをおろそうとした。

「ちよつとちよつと」

雅は呆れ笑顔を浮かべながら、息子の行動を静止する。

「するなら部屋で。いつも言ってるでしょ？」

ピシッと有介の部屋を指差す。

「イエスマム！ では任務を遂行いたします！」

唐突なキャラ変。

とはいえ、それはいつものこと。

有介の行動が突飛なのは、雅にもそれ以外の有介の知人たちにとっても周知のことだった。

そして有介は、自分の部屋へと駆け込んだ。

あとに残された母は、複雑な笑みを浮かべる。

「まったくあのバカは……」

嬉しいのか悩ましいのか呆れているのか面白がっているのか、雅は自分でもよくわかっていなかった。

とはいえこれが彼女と彼女の息子の日常。

少しばかり脱線することはあっても、そこそこ普通の母子としての暮らしが続いていくのだと思っていた。

今日、このときまでは。

覗く

そんなこんなで日曜日が過ぎていく。

（ちよっとやりすぎちゃったかしら）

そんなことを頭の片隅で考えながら、雅は夕食の支度をすすめていく。

考え事をしながらでも、雅の作業の手は止まらない。

長年の母としての経験が、雅のそれをほぼ自動化させていた。

考えているのは息子のこと。

いろいろとダメなところはあるけれども、雅にとって有介は可愛い一人息子だ。

できれば、幸せになって欲しい。

「でもその幸せってのの基準が、どうもおかしなことになってきてるような気がするのよねえ」

タンタンとリズムカルに包丁の音を響かせながら、雅は息子の将来を心配する。

（勉強はあんまりできないけど、頭の回転が遅いとかそういうのではないと思う。ただ単に、勉強

強に向いてないだけ。身体の方も健康に育ってると思う。膝は一回やっちゃったけど、普通に生

活する分にはまったく問題ないし）

今は亡き旦那の、わんぱくでもいいからたくましく育って欲しいという願いは、見事に叶って

いるように思える。

おそらくたぶん、いい学校に行ったりすることは難しいだろう。

可能性があるのはスポーツ推薦だが、膝の故障もあってそれはもうかなり厳しい。

（でもなんだか、どこに行ってもそれなりに上手くやっちゃいそうに思えるのよね、あの子）

世渡り上手というかなんというか、そのあたりのことは雅は一切心配していなかった。

心配しているのは別のこと。

有介の、歪に曲がってしまった女性の好みのことだ。

（なんであんな風になっちゃったのかしら）

ため息をつきながら、鍋をかき混ぜる。

ほぼ自動的に出来上がってくる夕食のメニューは、有介の好物ばかり。

それはごく普通に若者が好みそうなものばかりなのだが、女性の好みはそうではない。

（まさか、私くらいの年齢がちょうどいいとか言い出すとはねえ）

カチャツとコンロの火を止める。

考え事をしながらの夕食の準備が終わった。

雅は、有介を部屋まで呼びに行った。

「ふう……」

食事をしている有介の様子が少しおかしい。

いつもながらガツガツと食べるように食べるのに、今夜は妙に元気がない。

それは母親である雅でなくても、一目瞭然だった。

（やっぱり、ちよつとやりすぎちゃったかしら。あんな風に親にかかわれたら、ショックを受けてもしょうがないわよね……嬉しそうでもあったけど）

有介の元気がないのは自分のせいではないかと考えた雅は、なにか声をかけねばと思う。

しかし何をどう言ったらいいのかわからない。

エッチをネタにした言動で失敗したのだから、エッチとは無関係な方がいいのか。

それともエッチなネタで失敗したのだから、さらにエッチなネタで挽回した方がいいのか。

考えれば考えるほど、思考がループに入っていつてしまう。

謎に沈黙の時間が流れる。

聞こえてくるのはつけっぱなしのテレビの音と、食器のカチャカチャという音。雅の料理を咀嚼する有介の食事音。わずかにカチカチと時計の音も聞こえてくるが、ときどき止まりそうになるのは電池の寿命が切れそうなのかもしれない。

そして、その母子の沈黙がついに破られる。

先に口を開いたのは、有介の方だった。

「いやあ、さすがに続けて三回は抜きすぎたよ」

「は？」

思わず箸を落としそうになる雅。

てっきり自分の少し調子に乗った行動のせいで、息子が傷ついたのだと思っていた。

だが、そうではなかったらしい。

というかむしろ、このバカ息子は母のあのからかいを喜んで受け入れて三度もオナニーしていたようだ。

実の母のパンツを思い出しながら。

「あ、あのねえ……」

自分から煽っておきながら、さすがに少し引く雅。

しかしそれでも有介は自分語りをやめない。

「一度くらいじゃ全然収まらなくてさ、出た瞬間から二度目に突入したのは久々だったよ」

「……」

雅は無言になるしかない。

下手なことを言って藪蛇になっても嫌だったし、そもそも何を言えいいのかまったく思いつかなかった。

そもそもあんな風に言っただけでも、まさか本当に実の息子が自分をおかずにオナニーなんてするはずがないと思っていたのだ。

もしかして、うちの息子は本当にバカなのではないか。

うっすらと、雅はそんな風に考えていた。

「二回イッて少し収まってさ、しばらくしたらまたしたくなつて……ははっ。母さんのおかず性能マジ高い」

母の作ったおかずを食べながら、母をおかずにした話をする。

雅は呆れたように頭を振りながら、一言だけ有介に言った。

「あんた……元気すぎ」

「それだけが取り柄ですから」

妙な口調になりながらムキツと力こぶを作り筋肉を主張する有介。

雅は息子の将来を再び心配しながらも、そのお気楽さにどこか安心したのもまた事実だった。

（ま、なるようになるでしょ。なんてたって、私の息子なんだから）

雅の謎の信頼感。

もしかすると有介の楽観的な性格は、雅からの遺伝なのかもしれなかった。

食後――

「ふー、美味しかったー」

「美味しかったーじゃないでしょ」

「ごちそうさまでした」

「はい、お粗末様」

カチャカチャと食器を重ねて、有介がシンクへ運ぶ。

その間に雅がテーブルの上を片付ける。

「お茶入れるよ」

「はい、お願い」

なんだかんだ言っ二人での生活が長い雅と有介は、意識せずともお互いの役割分担を把握し、何も言わないうちに自分の役目を自然と果たす。

息子はヤカンを火にかけお湯を沸かし、その間に食器を洗って急須の準備をする。

母はテーブルを拭きお茶請けを用意し、お風呂の準備をして着替えを用意する。

ごく普通の家族の光景がそこにはあった。

お茶で一息ついたころには、さっぱりと消え失せてしまうが。

「お風呂できてるわよ」

「ほーい」

食後のひとときのあと、母からそう声をかけられ有介が席を立つ。

そしてクルリと母を振り向くと、最高の笑顔を浮かべながらこう言った。

「せっかくだから一緒に入ろうか」

「なーに言ってるのよ」

いつもの冗談だと雅はスルーをする。

ところが息子の一部を見た瞬間に、それがいつものとはちよつと違っていることに気づく。

「あんだ……」

「ん？」

ジト目で息子を見る母。

息子は相変わらずの笑顔で、さらにはキランと白い歯を輝かせたりもしている。

股間を妙に膨らませながら。

「勃起してるでしょ。バレバレよ」

「まあまあ、気にしない気にしない」

「気にするに決まってるでしょ？」

「いいじゃないこれくらい。家族なんだからさ、たまには一緒に入ろうよ」

「あのねえ……そういうセリフは、そこをまずどうにかしてから言いなさい」

「そのどうにかするため一緒に入ろうって言ってるんじゃない」

「……」

ビシッと浴室の方向を指差す雅。

「あんたは一緒にお風呂に入りたいわけじゃなくて、新しいおかずが欲しいだけでしょ？ バカなことやってないで、とっとお風呂入る」

「ちえっ。ダメかー」

「ちえっじゃない。ダメに決まってるじゃない」

「はい。じゃ、入ってきまーす」

「ちゃんとおちんちんも洗うのよ」

「らじゃー」

「ったく……」

そしておよそ一時間ほど経った……。

「ふんふんふふふんふふふん♪」

有介が出たあと、今度は雅が入浴していた。

「ふんふふふふんふふふん♪」

気分良さそうに鼻歌を歌いながら、シャワーで身体を流している。

「とんでんぱらりのぱんぱらりん♪ とんでぱらぱらぱんぱらりん♪」

その歌の意味はよくわからない。

もしかすると、即興で作った適当な歌なのかもしれない。

そんな風に気分よくしながらも、やはり雅が考えるのは有介のことだった。

（あのバカ……ホントに大丈夫かしら。一緒にお風呂に入ろうだなんて、そんな幼稚園のとき

以来じゃない)

小さなころの有介が頭に浮かぶ。

(昔はあんなにかわいかったのに。まあでも、だからあの人がたくましくなって欲しいって地元
の少年野球に入れたりしたんだだけでも)

今は亡き雅の旦那にして有介の父親。

彼は、自分の体力のなさをずっと後悔していた。

その後悔からなのか、彼は息子である有介が身体を動かすことを好きになるよう誘導していた
フシがある。

休日には山や海、それが無理でも近所の大きな公園に出かけ、有介と一緒に走ったり飛んだり
していた。

帰ってきた有介はニコニコ。あまり体力のある方ではない旦那はヘトヘト。

そんな二人を、雅はいつも微笑みながら見守っていた。

それがまさか、あんなエキセントリックなオナニーマンに成長してしまうとは。

「はあ……」

ザーツと肌の上を流れ落ちるシャワーの音が、雅のため息をかき消してしまう。

しかし、心の中のモヤモヤは一緒に流れ落ちていったりはしない。

「なんだかなあ……」

確かに有介はたくましく育った。

膝の怪我也あって野球の第一線からは退いてしまったけれども、できるスポーツはまだたくさんある。

それに一流のアスリートでも目指すのでないかぎり、膝の故障は気にならないくらいだ。

本人も身体を鍛えるのは好きみたいだし、楽しむためのスポーツならいつでも開始できそうに見える。

学校の成績はイマイチだけど、地頭は悪いわけではない……と思う。

それなのに……。

「その体力をあのかは、全部オナニーに注ぎ込んでるのよねえ。はあ……」

神尾家はかなりオープンな家庭だ。しかもその上、有介には隠す気がない。

はじめての射精のときにも、有介は雅に報告しにきたくらいだ。

もともと、そのころにはまだ旦那も存命だったが。

「あれで普通に同年くらいの女の子に興味があるんだったらまだよかったんだけど」

あの性欲を同年の女の子たちにぶつけていたら、それはそれで問題になっていたかもしれない。思ったが、起きてもないことにまでは雅の想像は及ばなかった。

考えながら、自らの体を洗う雅。

たっぷりと泡立てたボディソープが、雅の身体を飾っていく。

柔らかいスポンジでその肌を磨き、温かいシャワーで洗い流す。

「ふう……」

今日一日の疲れが、すべて洗い流されていくような錯覚を憶える。

こんな風に、頭の中のモヤモヤも全部洗い流せばいいのに。

雅は、そんな風に考えていた。

「にしてもねえ……」

食事のあとの有介の言動が思い出された。

「あのバカ、ホント何考えてるんだろ。こんなおばさんからかったりして」

周りからは若く見えると褒められる雅だったが、自分がもうおばさんと呼ばれる年齢であるこ

とも自覚していた。

確かにそれなりに身体のラインは保っているし、そうするための努力も自分はしている。

たぶん、有介が身体を鍛えるのが好きなのは自分の遺伝だ。

もしかするとあの性格もそうかもしれないけど、あそこまで自分はエキセントリックではない

と、雅は思っていた。

「あの人の影響……なのかな」

雅の死んだ旦那も、そこまで変わった性格をしていたという記憶はない。

どちらかといえはおとなしい人。

少なくとも、自分や有介ほどには奇異な性格はしていない。

（まあでも、私も知らなかった秘密があるのかもしれないけどねえ）

ところが、かの人にはそういったものはまったくなかった。

性にはかなり淡泊で、それこそ雅くらいしか経験はなかった。

愛情にはかなり深い方ではあったが、肉体的な快楽にはかなり無頓着だった。

もつとも、そういったことにのめり込むほどのスタミナがなかった、というのも原因の一つではあったかもしれないが。

「あー、やなこと思い出しちゃった」

旦那のことを考えているうちに、雅は記憶の底に閉じ込めようとしていたあるエピソードを思い出してしまった。

パート先の、超がつくほどのおせっかいおばさん。

彼女が、しつこいほどに雅に再婚の話を勧めてきたのだ。

来る日も来る日も新しい釣書を持ってくる。

どこにそれほどのツテがあるのかというくらい、様々なジャンルのお見合い相手のものを。

雅は、そのすべてをきっぱりと断っていた。

息子の有介が独り立ちするまでは、そういう話をお受けするつもりはありませんと。

それでも彼女はしつこく、それでもかというくらいに見合いを勧めてきた。

今日の、昼間のパートの時間にも。

「はあ……もめたくないのよね、今の職場気に入ってるし」

雅にも、いろいろあるようであつた。

ゴトツ――

「え？」

不意に小さな音がして、雅の意識がそちらの方に向く。

音がしたのは、脱衣所の方。

扉一枚隔てた向こうで、何かがゴソゴソ動いているようだった。

「まったく、あのバカ息子は……」

雅はすぐにその物音の正体に気づく。

というか、それしかなかった。

（ホント、しょうがないんだから）

実の母の入浴を覗く。

極めてマニアックでアブノーマルな行為を、息子がしている。

どうやってこらしめてやろうかと雅が考えているうちに、脱衣所からしていたかすかな気配はすっかり消えてしまっていた。

（あれ？）

しばらく耳をすまして気配を探ってみる。

でも、聞こえてくるのはシャワーの音だけ。

キュツと小気味よい音を立てながら蛇口を締める。

ポトンポトンと水滴が落ちる音以外は、何も音がしなくなる。

（もしかして……気のせいだった？ ううん、確実に脱衣所に誰かいたはず）

雅は外の様子を伺いながら、そーっと脱衣所へとつながる引き戸を開いていく。

カラララと軽い音と立てながら、引き戸が開かれる。

（やっぱり……誰もいない？）

バスタオルを手に取り、身体に残った水分を吸い取らせていく。

（なんだろう……覗いてたんじゃないのかな）

自分が入浴しているときの脱衣所に有介が侵入してすることなんて、覗きくらいしかなさそうなのに、そんな風に雅は考えていた。

「あれ？」

ふとした違和感に雅は気づく。

「あいつ……」

チツと舌打ちをして、少しだけ雅の表情が歪んだ。

「そっちはやめろよなー。さすがに私だって恥ずかしいんだから」

雅の視線の先には、洗濯カゴがあった。

その一番上に、無造作に置かれた雅の下着。

それは、さっきまで履いていた使用済みの下着である。

「まったく……」

雅は脱いだときに、下着を一番下に入れる習慣がある。

年頃の息子を持つから、ということもないわけではなかったが、なんとなく人に見られるのが
気恥ずかしいというのが一番の理由だった。

それを、あのバカ息子は発掘していった（たぶん）。

「まさかあの子、これをイタブラしたりしたんじゃないよね」

現場には、うつすらと栗の花のような臭いが残っていた。

雅はその臭いには気づいていたが、あえてそのことには触れないことにした。

有介の言葉は、冗談だと思いたかったから。

まさか本当に、自分とセックスすることを息子が思っているなんて想像もできなかったから。

（続きは本編で）